

コンラッド作品におけるラテン・アメリカ

—「ガスパー・ルイス」を中心に—

Latin America in the Works of Joseph Conrad : On 'Gaspar Ruiz'

渡 辺 浩

I. はじめに

コンラッド作品の中でラテン・アメリカを舞台にした代表作には長編『ノストローモ』(Nostromo, 1904) が真っ先にあげられる。実際にラテン・アメリカに滞在した機会や期間もほんのわずかであったにもかかわらず、実際の描写に関しては非常に卓越したものがあつた。¹ なぜこのような見事な状況や雰囲気の詳細が可能であったのかを考える場合に、資料の分析や作家の筆力の秀逸性を考慮に入れることは当たり前のことと思われるが、何よりもコンラッドのラテン・アメリカという地域や国々の特色や人間性を洞察する力という点に思い当たる。乾燥したパンパの大地を舞台に、スペイン系の支配者と混血や現地人の被支配者たちとのせめぎ合い、不安定な政治情勢などが相まって、巧みに不毛の大地に展開されるいつ果てるともならないような民族同士の軋轢が巧みに描写されている。

上述の長編『ノストローモ』においては、イタリア人で超人的な体力と本能を持ち合わせる主人公ノストローモ (Nostromo) が、中南米の架空の国コンスタグアナ (Constaguana) を舞台に、進歩派と保守派の抗争の最中を、その超人的な能力を買われて軍事活動の裏方として神出鬼没に活躍する物語である。しかし最終的に自分が過信していた力も大きな歴史の流れにおいては大したものではなく、信じてきた上官たちにも裏切られたという疑念を抱き、清廉潔白だった彼はついに軍資金の銀塊を盗んでしまう。そして最終的には自分の運命にも裏切られるような形で死に至る物語である。

この評価の高い長編とは別に、この作品の取材の副産物的に書かれた短編に「ガスパー・ルイス」('Gaspar Ruiz', 1906) がある。この作品は1906年に『六つの短編』(A Set of Six, 1906) の中の一つとして出版されたが、原稿料を得る目的で執筆したと言われているわりに、² 内容は非常に興味深い点が多く、ラテン・アメリカを舞台に、情景や人物描写も巧みな内容となっている。ある意味では名作『ノストローモ』の原型となるような要素が多く盛り込まれていると言える作品である。双方の主人公が超人的な体力と行動力、また野生動物のような本能的な勘を持ち合わせている点や、革命の動乱に揺れるラテン・アメリカをその特異な能力で生き抜いて行く点、またその主人公たちに運命を左右する女性が登場し、最後には悲劇的な死を迎える点など、相互に共通性があることは容易に窺える。

以上の内容をふまえて、この論考においてはコンラッドのラテン・アメリカを描く過程に

において、その風土や人間性をどのように織り込みながら、この地域特有な舞台を創り出していったのか、この点を短編「ガスパー・ルイス」を中心に分析する。またこの作品で大切な部分は、主人公ガスパー・ルイス（Gaspar Ruiz）と彼に影響を及ぼす女性ドニャ・エルミニヤ（Doña Erminia）との関係がこの地域の風土を描くにあたって象徴的な性格と行動を伴っている点である。以上の要素をふまえて主人公と主要人物たちとの関係を考慮しながら、コンラッドが創造したラテン・アメリカ的要素、とくにその精神的側面を考察することにする。

II. 政治的風土

舞台は十九世紀初頭、独立革命最中のチリとペルーを中心とした政治・軍事紛争に揺れるラテン・アメリカである。アルゼンチンの独立の父とされるサン・マルティン（José de San Martín, 1778-1850）の軍の中尉であったサンティエラ（Santierra）が、数十年後將軍となった立場で昔の体験を訪問客に語り、物語は展開する。他のコンラッドの物語ではマーロウ船長（Captain Marlow）が過去の体験を物語る形で進められる話が幾つかあるが、この手法は作品にリアリティを与える点で今回も有効に使われている。

ラテン・アメリカ諸国の独立運動はシモン・ボリバル（Simón Bolívar, 1783-1830）や上記のサン・マルティンに代表されるようにスペインの植民者の中でも名門の家系に属するクリオーリョたちが独立の動きに賛同し立ち上がる例が多く見られる。しかし独立運動と同時に植民者たちの中でも有力地主たちの利権を守る性質も有しており、下層市民の生活に大きな改善が見られたというわけではない。ある意味では啓蒙思想に基づく自由獲得の旗印に燃える革命という表向きの理想と、現実にはボリバルが求めた大コロンビアの構想が結局は各地方の分裂により果たせなかった、複雑な事情や利権がからむ状況であった。

そうした意味で語り部のサンティエラ將軍は共和派（独立派）に属する新しい国造りの理想に燃えた人物であった。その彼の軍歴や人生に大きな影響を与え、予想もつかぬ影響を共和派に及ぼした人物がガスパー・ルイスであった。彼の出自は貧民階級であり、王党派と独立派の覇権争いは彼らの生活改善にはあまり関係ない有様であったのだが、たまたま彼の父親が経営する牧場を通りかかった共和派の軍の将校に説き伏せられて彼が軍に加わったことが事の発端であった。しかし不幸なことにたまたま王党派軍の捕虜になった時に、無理やり軍の先頭を他の捕虜と共に小銃を持って歩くように命じられた。結局それが共和派に対する裏切り行為と見なされ、脱走兵として銃殺される運命となった。

したがって彼の出自や不幸で惨めな出発点を通して象徴的に描かれる点は、当時の悲惨な状況に置かれていた下層市民や混血の民、原住民、黒人奴隷たち、また大部分の小作農などの悲惨さであった。彼らにとってはスペイン貴族の支配が大地主の支配に変わる程度の変化という有り様であった。そうした環境の中で、ルイスが大した理由もなく場当たりのなきっかけで共和派軍に入り、またつまらない理由で裏切り者、脱走兵扱いで処刑される運命に立たされる物語は、当時の国情と運命に翻弄される下層弱者の実状を表す内容ともとれる。し

かした強靱な体力と生命力を宿す彼は、中南米の過酷な環境を生き抜く庶民の強さの象徴とも考えられるであろう。彼の一家の農場に押し寄せた共和派の一派は「自由、万歳」(“*Viva la Libertad!*”)と唱え、それを旗印にルイスを勧誘したが、行っていることは山賊の類の略奪行為である。その直後にまた掃討作戦と銘打ってその牧場を完全に焼き払った王党派の一派も、庶民の窮状を意に介さない身勝手な連中として描かれている。そして強靱な体力とは裏腹にとて物事に対して素直で人の言うことに驚くほど従順な彼は、政治と環境に最も影響されやすく根は子供のように素直な市民そのものである。また彼には無意味に暴力を振るうことも相手を威圧することもなかった。理不尽な扱いを受けてすし詰めの牢獄に入れられた時も、のどの渇きにあえぐ仲間のために危険を顧みず水の調達を行う非常に思いやりのある人物として描かれている。とにかくルイスは精神的にはあくまでも純粋で真面目な庶民であり、その生き方、態度や物腰もある意味では紳士にふさわしいものであった。

“I confess to you, señores, that I thought of that strong man with a sort of gratitude, and with some admiration. He had used his strength honourably. There dwelt, then, in his soul no fierceness corresponding to the vigour of his body.”³

こうして見ると共和派にしる王党派にしる、国の情勢を左右し、己のイデオロギーや利権によって行動する貴族や地主階級の連中の野蛮さと残酷さが浮き彫りにされている。この点に関してはコンラッド作品によく見られる政治的な告発、あるいは皮肉な描写と解釈される場面である。しかしルイスは持ち前の強運により生き延びることになる。仲間全てが銃殺刑にあいながらその死体の山の中で、しかも彼に敵意を抱く残忍なエスタバン (Estaban) 軍曹のとどめの一撃を受けたにもかかわらず運良く死を免れる。そして彼は宵闇にまぎれて逃げ延びたのである。

ノストローモにも共通し、また他の作品の主人公たちにも当てはまることではあるが、主人公には強運の持ち主が多く見受けられる。生死をさまようような事件に遭いながらも生き延びて数奇な活躍をする主人公たち、例えば『西欧人の眼に』(Under Western Eyes, 1911)におけるラズーモフ (Razumov) や『密偵』(The Secret Agent, 1907)のヴァーロック (Verlock)、また『ロード・ジム』(Lord Jim, 1900)におけるジム (Jim)なども強運により窮地を脱するが、最終的に運命に翻弄される末路をたどる。このようにコンラッドにおける強運には、一見本人の持つ強運のようでありながら、最終的には一筋の太い糸に操られた強い運命観が現れている様子がわかる。個人の努力とか抗いを超越した運命が国や世界の規模で展開し、個人や庶民の生き様を飲み込んでいってしまうような強い運命の流れを感じさせる作品が多い。しかし巨視的な運命観の中で個人が疎かにされているわけではなく、小さな個人の存在が大きな環境に影響を与え、その相互作用の中で個人の偉大さであるとか、また個人の心理と視野からみた社会や世界の矛盾、皮肉を描き出す手法が巧みに用いられ

ている。⁴

That one evolved out of the naïve heart of the great Russian people, “Man discharges the piece, but God carries the bullet,” is piously atrocious, and at bitter variance with the accepted conception of a compassionate God. It would indeed be an inconsistent occupation for the Guardian of the poor, the innocent, and the helpless, to carry the bullet, for instance, into the heart of a father. (18)

こうして見ると、ルイスの生き様と活躍は、小市民の代表でありまた運命に操られながらも意志のある縲り人形なのである。しかしまたサンティエラ将軍が語るように共和派を混乱の渦に陥れるほどの騒ぎを引き起こす力がある。

III. 女性の力

エイミー・フォスター (Amy Foster) に代表されるように、物語に登場する頻度の差こそあれ、コンラッド作品における女性の役割は決して小さいものではない。とくに女性が象徴的に表すものは、土着的な要素とか純粋さ、また大地を象徴するような力強さ、暖かさという要素が強く感じられる。『オールメイヤーの阿房宮』(Almayer's Folly, 1895) における主人公の娘ニーナ (Nina) はヨーロッパ人と現地人の混血として両者の板挟みとなり、『西欧人の眼に』のナタリー (Nathalie) などはロシアの凍てつく大地に暖かさと希望をもたらす象徴であり、『ロード・ジム』における主人公の恋人ジュエル (Jewel) なども現地人としてのアイデンティティーを強く表している。しかしまたエイミーがイギリスの田舎町の娘として、外国人の夫ヤンコー (Yanko) と最終的に異文化の壁を超えられぬ存在としての個性を強く表しているように、外的な要素を受け入れられない面も多く見られるのである。

それでは「ガスパー・スイス」における女性エルミニヤの場合はどうであろうか。彼女は命からがら逃げて来た瀕死のルイスを助けた王党派の娘であった。父親はスペイン人の貴族であったが革命の嵐の中で全ての財産を失い、ほぼ発狂状態で生きていた。一家は殆ど生きるすべを失って祖国へも帰れずに、人目に付かない一軒家で隠遁生活をしていた。そこに彼がたどりつくわけである。

しかしここで注意しなくてはならない点は、他の作品における女性たちとは異なり、彼女自身はスペイン人の血を引く者として、外国人のアイデンティティーを持つ点である。どちらかというルイスが土着的な強さを持つ人物であり、天真爛漫な性格は従来のコンラッド作品における女性像を彷彿とさせる。その点においては男女の立場が逆転してしまった感がある設定であるが、まさにこの点がラテン・アメリカの風土と土地柄を表す状況とも言える。なぜならば土着の文化、古代から静かに発達した文化が突如としてヨーロッパの勢力に侵略され、武力と異教に支配されることとなったのである。しかも今独立運動を起こしている主

体者たちも、もとをただすならばそのスペイン人の末裔である。言わば侵略も革命も全て異国の者たちによってもたらされたものと断言できるのである。

形式的には特異と映る人物設定ではあるが、コンラッドの物語作成の理念としては変わらぬ描き方が窺える。というのは女性がカルチャーとアイデンティティーの問題に大きく関わり影響を与える点において、このエルミニアの場合も決して例外ではないからである。女性が主人公と運命的な出会いを通して同化し、大きな影響を与えてゆくプロセスはこの作品でも共通である。

“It was no doubt very dignified; but I should have done better if I had kept my eyes open. A military man in war time should never consider himself off duty; and especially so if the war is a revolutionary war, when the enemy is not at the door, but within your very house. At such times the heat of passionate convictions passing into hatred, removes the restraints of honour and humanity from many men and of delicacy and fear from some women. These last, when once they throw off the timidity and reserve of their sex, become by the vivacity of their intelligence and the violence of their merciless resentment more dangerous than so many armed giants.” (24)

もしこのエルミニアとの出会いがなければルイスの強運も超人的な能力も日の目を見ずに消え去るところであった。彼にとっては本来共和派と王党派の区別というようなものは大したことはなかった。そうした政治的な理念や関心を持たない単純で一途な性格はちょうどエイミー・フォスターの男性版のような設定とも解釈できる。それにより体力や本能的な勘は超人的なものをもちながら、性格や知力は素朴で単純な人物設定にされている理由が理解できる。元来土着的な要素や大地のイメージとして描かれていたコンラッド作品に多く見られる女性像が、この作品においてはルイスに託されていると考えられるのである。

本来一つの国の風土や歴史、文化を象徴化する為には地域と大地に根差す女性のイメージが打って付けの場合が多い。しかしノストローモの場合にも窺えることであるが、ラテン・アメリカの国情や文化自体が複雑で一種の混血の状況とも言える。すなわち上述のごとく支配者と革命派の中心はもとをただせば同じスペイン人であり、革命に巻き込まれ多くの犠牲を払わされているのは混血の民や貧民、現地人、奴隷という状況である。最終的にラテン・アメリカのアイデンティティーに関してははっきりとした明確なものが見出しにくいということが、ラテン・アメリカ諸国の精神上的の悩みであることはよく指摘されることである。⁵

そうした状況の中で、戦乱に苦しむ民衆や革命の渦中で、政治・軍事の活動面で影響を受ける主人公を設定した場合に、ルイスのような民衆像を想定した方がよりラテン・アメリカの風土と国情を描きやすかったのではないかと想像できるのである。

その地の政治と革命を左右していたものは、結局スペインというヨーロッパの王国とそれに抗う南米の共和派の動きであった。またそうした共和制や自由主義の思想も結局のところヨーロッパの啓蒙思想やそれを学んだ者たちによって南米にもたらされたものであった。また独立はしたいが現地の支配者階級の連中は自分たちの既得権は放したくないという、多くの民衆不在のような独立運動なども含めて、ラテン・アメリカにおける文化や政治事情は複雑なものがあり、自らのアイデンティティーを確認しにくい点が残されていた。

こうした内容を含めて、ヨーロッパの出自をもち、スペインの王党派の勢力や伝統を受け継ぐ女性としてエルミニアを登場させた点は、ある程度コンラッドの創作上の計算も想像できる。一つの滅び行く勢力としての王党派であるが、土着のもの、あるいは民衆に影響を与え、一つ流れが変われば逆に大きな勢力と成り得るものの象徴として彼女を登場させれば、当時のラテン・アメリカの革命状況をシンボライズできるわけである。実際、エルミニアもルイスとの出会いがなければ落ちぶれたスペイン貴族の娘として滅び行く運命にあった。しかし彼を助け励ますことにより自分も息を吹き返し、彼の超人的な能力を利用して大きな反革命勢力となるのである。

こうした大地に根差す庶民的な力強さや息吹、思想的精神的に支配する旧大陸の力とが相まって大いなる勢力となって行く課程は、この物語に関しては独特な特徴である。コンラッド作品のモチーフとしては全体的に異文化の遭遇と対立のプロセスがよく取り上げられる要素である。しかしこの作品の場合、ルイスとエルミニアは終始対立するわけではなく、むしろ一心同体のように活動してゆく。最初の出会いによりルイスが命を助けられ恋愛感情を抱く点は、ヤンコーがエイミーに抱いた感情と類似するものであろうが、その後の二人が対立する姿とは全く対照的である。

これはコンラッドが強く意識したか否かにかかわらず、最終的に彼が描く人間関係がその土地の風土や文化、人々を巧みに描き出す結果となっている。今回も彼は、登場人物の人間関係を用いてラテン・アメリカという風土が本来ヨーロッパ的なものを色濃く受け入れながら、方向性の定まらぬ運命をたどる、あるいは偶発的な気運に流されやすい性質を暗示しているのではないかと考えられる。

And in a mournful murmur he would go over the story of his capture and recapture for the twentieth time. Then, raising his eyes to the silent girl in the doorway, “Si, señorita,” he would say with a deep sigh, “injustice has made this poor breath in my body quite worthless to me and to anybody else. And I do not care who robs me of it.” (30)

その証拠には、ルイス自身が大した信念なしに共和派軍に志願し、またしっかりとした根拠もなく王党派への裏切り者扱いを受ける経緯、また偶然に王党派の娘に助けられ、しかもまた偶然の大地震に見舞われたときに、共和派のサンティエラとその上司ロブレス師団長

(General Robles) をたまたま助けたことにより、裏切りと脱走（これは濡れ衣であったのだが）の罪を許されるという幸運を得る。⁶

そして物語前半の大きな転換点の一つは、地震の後しばらくエルミニアを連れて行方不明になっていたルイスから当時の共和派の最高司令官であったサン・マルティン宛に手紙が届いたことであった。物語の中ではそれはエルミニアが意図するところをルイスに書き留めさせたという設定になっている。つまりこの時点で彼はエルミニアに完全に精神的に操られていたか、もう少しましな見方をすれば一心同体になっていたと言えるであろう。

I remember it struck me at the time as noble—dignified. It was, no doubt, her letter. Now I shudder at the depth of its duplicity. Gaspar Ruiz was made to complain of the injustice of which he had been a victim. He invoked his previous record of fidelity and courage. (42)

IV. 復讐の行動原理

この出来事に関しては、単にルイスとエルミニアが共謀して自分たちの汚名をそそぎたいと純粋に考えていたのか、あるいはその後王党派に寝返ることになるので、この時点で意図的に共和派に取り入ろうとしたのかは定かではない。しかしはっきりとしていることは、最後までルイスの活動を強く支持した扇動したのはエルミニアであり、彼女が王党派の血を引く者として、共和派に対して強い憎悪を抱いていたことである。ストーリーの流れからくみ取れることは、彼女の思想というよりはそうした心の奥に潜む強い情念が無意識のうちにルイスだけでなく、彼を取り巻く環境まで変えてしまったことである。なぜならばサン・マルティン宛に手紙を書き、彼に忠誠を誓った当初はスペイン軍相手にめざましい戦果をルイスがあげてゆき、南部方面軍の司令官という華々しい役職まで拝受して活躍が続けるが、後に彼を中傷した幹部を殺害し共和派の軍を裏切ることになる。軍内部の奸計にはめられたのはルイスであったが、このようなことで安易に共和派軍の幹部としての立場や権威を捨てるとは理解しがたい面がある。

物語全体を通してルイスの行動原理は復讐心を根本にしていることが分かる。一度銃殺刑にされた死体の山から抜け出したのも彼にとどめをさそうとしたエステバン軍曹に対する復讐心であり、共和派か王党派のどちらにつくのかは最初から二の次のような状況であった。先にルイスは一種の民衆的な性格を代表するような人物と考えられると述べたが、民衆にとっても自由を与えられない苦しい状況や政治・経済不安、またある程度立場のある者は既得権を守りながらの独立を模索したり、同じスペイン系でありながら移民やその末裔たちは低く扱われスペイン本国出身者が幅を利かすような社会状況などが国内に充満していた。様々な点で現状打破を行いたいという社会全体の不満の発露が大きな独立運動の潮流となった状況、つまり様々な意味での不満や復讐心が革命・独立運動の原動力となったことは間違いない。⁷

またそうした復讐が復讐を生むような不安定な状況をコンラッドはラテン・アメリカの国情に見て取ったに違いない。また革命や自由を求める思想の根本である啓蒙思想自体がヨーロッパから移入されたものであり、ラテン・アメリカ自体のアイデンティティーの欠如というものも未だに解決されぬ問題として残っている。そうした意味での政治・思想上の不安定も精神的な不安定に起因するものと言えるであろう。

こうした状況、様々な不安定な要素がひとたびある種の動機付けが行われればすぐさま一つの方向に動きだしてしまう結果は容易に予想できる。コンラッドは史実に基づいて巧みにラテン・アメリカの政治・軍事状況を描写しているが、その地域特有の不安定性、ラテン・アメリカらしさというものを上記のごとく民衆のおかれた精神状況に還元し、ルイスやエルミニアのような登場人物にシンボライズさせている様子が窺えるのである。

エルミニアは確かにスペイン人の娘で共和派から徹底的に攻撃迫害された王党派の家族の一員で、死ぬまで共和派に対する復讐心で行動していた女性であった。しかし国家とか国民に対する総合的な分析や判断などとは無縁の人物である。ひとたび覚悟を決めて行動する女性の強さを物語るサンティエラ將軍の意見はとくに印象的に語られている。

The General, who bore the interruption with gravity, nodded courteous assent. “*Si. Si. Under circumstances. . . . Precisely. They can do an infinite deal of mischief sometimes in quite unexpected ways. For who could have imagined that a young girl, daughter of a ruined Royalist whose life was held only by the contempt of his enemies, would have had the power to bring death and devastation upon two flourishing provinces and cause serious anxiety to the leaders of the revolution in the very hour of its success!*” He paused to let the wonder of it penetrate our minds. (25)

このように考えてみると、バランス感覚のない行動原理、一つの強い衝動に駆られた行動は結局国や社会に戦禍と災禍をもたらし民衆を苦しめる結果になること、また執拗に偏った思想や行動原理をもつカリスマ的な人物が混乱と不安を招いて行くプロセス、そうした安定を欠く極端な特徴を作家はラテン・アメリカの地に見出したのではないのかと考えられるのである。

実際にエルミニアはルイスにとって妻というよりも神託を告げる巫女のようになり、また行動原理の根本となる信仰対象のようになってゆく。

She was insatiable. Moreover, on the path she had led Gaspar Ruiz upon, there is no stopping. Escaped prisoners—and they were not many—used to relate how with a few whispered words she could change the expression of his face and revive his flagging animosity. They told how after every skirmish, after every raid, after every successful

action, he would ride up to her and look into her face. Its haughty calm was never relaxed. Her embrace, señores, must have been as cold as the embrace of a statue. (48)

エルミニアの役割は復讐に燃える女神が自分の思いを遂げるために民衆を扇動してゆく様になぞらえる。本来は本国生まれのスペイン人（ペニンスラーレス）と新大陸生まれのスペイン人（クリオーリョ）の対立軸が中心に独立運動が展開され、本当の下層市民、奴隷階級の人たちなどはその政治・軍事的な渦中に巻き込まれてしまったケースが多々あったものと推測される。そうした戦乱と災難に巻き込まれた庶民の不幸とか惨状をコンラッドはラテン・アメリカの不幸の現状ととらえ、その不安定なるものの要素を取り除かない限り永遠にその地の不安は解消されるものではないと見抜いたのではないかと考えられる。

エルミニアは味方の裏切りにあい共和派に捕らえられる。ルイスが自分を砲台代わりにするという命がけの救助もむなしく、彼は失敗し命を落とす。彼女はそれを見届けた後捕虜として再び連行される山道で自ら身を投げて死を遂げる。ルイスが死ぬ間際に初めて彼女が彼に対する愛を告げるが、「これは本当か？」と問いかけるルイスの言葉に、彼女は「この世の中に慈悲や正義がないのと同じくらいに本当よ」(“As true as that there is no mercy and justice in this world,”) (66) と冷徹な言葉で答えるのであった。

この二人は異性の愛情というよりもサンティエラ将軍が回想するように「憎しみの狂気」(the madness of hate) (26) によって結ばれていた。もっと一般的な見方をすれば戦乱が引き起こした深い復讐心で結ばれていたと言えるであろう。それはまさしく混乱の中で苦悶する多くの民衆の行動原理であり心理状態であった。

考えてみると、たとえ何かのきっかけでエルミニアが共和派に与することになったとしても同じような復讐心で行動していたことであろう。ルイスは復讐の怒りのはけ口を求める庶民であり、エルミニアは復讐の息吹を吹き込む精神的な支柱であった。最後にその肉体的・物理的な支えを失った精神とイズムは自ら滅びる以外になかったのである。⁸

エルミニアは死を遂げる寸前にサンティエラに幼い娘を託すが、物語の最後の場面でその娘は彼の養女となって成長し、名前も母親と同じくエルミニアと呼ばれていた。そして嫁ぐこともなく彼とその家名を守る決心をしているのである。ルイスと母親の特徴を色濃く受け継ぐこのがっしりとした体躯の娘が、共和派のサンティエラ将軍の養女となるという設定は戦乱の後の平和、抗争の後の協調を意味するものと考えられるが、それ以上に歴史的文化的に複雑なラテン・アメリカの風土を象徴しているとも解釈できる。すなわち様々な形で受け継がれてきたもの、海外から流入してきたものが、時代の流れと共に反発しあったりまたときには一つになったりという極めて流動的な情勢が、人物の人間関係や遺伝的な部分に転化されているのである。そうした込み入った不安定な状況を描写しているとも考えられる結末である。またこの場面は、将来にわたってアイデンティティーの特定がしがたく主義や思想を確立することが難しい、また一時的な安定の為にはすぐに独裁政権や軍事政権が顔をだす

不安定な状況を内包するラテン・アメリカの風土を象徴的に表している。⁹

V. 結 論

南米を舞台にした長編傑作『ノストローモ』に関してはやはり、上述のラテン・アメリカの政治的文化的に不安定な状況を色濃く感じさせる作品である。しかしこの作品の場合そのシンボルの基調として使われているものは物質的な側面である。内容は南米のコスタグアナという架空の共和国を舞台にサン・トメ (San Tomé) の銀山をめぐる、物質的な富の力で国を豊かにしようとする鉱山主のグールド (Gould) やそれに協力する前大統領のリビエラ (Ribiera)、またそれに対抗する土着の勢力や革命騒ぎの中で、はじめのうちはグールドやリビエラ側に立って活動した超人的な体力と本能的な能力をもつイタリア系の人夫頭のノストローモの物語である。彼は頑固で誠実な男として皆の信頼を得ているが、あることをきっかけに支配者層に利用されていると思ひこみ、銀山の銀を運び出す作戦を行ったときにそれを盗むことを決意する。戦乱が収まった後にその銀をもとに私腹をこやしてゆくが徐々に精神的に墮落してゆき、最後は許嫁の姉妹ともだらしのない関係に陥り、恩人である姉妹の父親に勘違いされて撃ち殺されてしまう顛末である。

この作品の秀抜さはラテン・アメリカの不安定な情勢を、物質的な富という視点を軸に巧みに分析し描いたところにある。そこには真剣に富の力で国を再建しようとする態度もあれば私利私欲の為に富を奪おうとする勢力もあり、また純粹に精神的な国の再建を目指す者もいる。またヨーロッパや北米の思想や影響にかぶれた人物たちも登場すれば、土着の伝統やしきたりに固執する者たちも登場する。そうした中で意識的にせよ否かにせよ銀山の富の力を中心にその渦中の影響が周囲に波及してゆく様子、とくに政治と軍事にかかわる人物たちへの影響が巧みに描かれている。これはラテン・アメリカの情勢を描写する点で説得力のある視点であり、一世紀以上経過した今日から見ても古さを感じさせない出来映えである。

これに対して「ガスパー・ルイス」においてはラテン・アメリカの精神面を分析することにより、ラテン・アメリカの風土と状況を描き出した作品と言えるであろう。人物描写的にはガスパー・ルイスとノストローモは非常に共通した特色を持っている。その超人的な体力や動物的な鋭い本能をもって難局を乗り切る力や体力に比して従順で単純な性格等は上記の通りであるが、両者ともに信じるものに裏切られた時点から人生の進路が狂い出すところ、あるいはむしろ彼等らしい活動を始める点などである。

しかし決定的に異なる点はノストローモが最終的に富の象徴である銀を盗むことによって裏切りに対する復讐心を満足させようとしたことに対し、ルイスの場合には最後までエルミニアなる復讐の権化にしたがって復讐を遂げようとした点である。一つの主義主張を信じて一途に向かって行くことは革命にとっては付き物であり、またそれに伴う苦難や犠牲の大きさが歴史上にその賛否は別としてその大きな痕跡を残す。その悲劇と混乱の大きさがラテン・アメリカの歴史上のカオスとしてまた特色として残り、未だに影響を与えていることは否め

ない事実であろう。そうした意味でルイスは民衆の代表であり犠牲者でもあった。¹⁰

He lay there before me on his breast under the darkly glittering bronze of his monstrous burden, such as no love or strength of man had ever had to bear in the lamentable history of the world. His arms were spread out, and he resembled a prostrate penitent on the moonlit ground. (62)

しかし革命における民衆の悲劇は扇動者の思想や意見に大きく左右され、ひとたび方向を誤れば結局その代償を払わねばならぬのは民衆自身ということになる。コンラッドはそうした政治的矛盾や無政府主義の思想に関して常に警鐘を鳴らすような作品を様々な形で書いているが、この『六つの短編』におさめられている作品も全て多かれ少なかれこうした政治的な矛盾や世の中の矛盾を宿している作品である。

そうした意味で、この「ガスパー・ルイス」はその中でも具体的な歴史を背景にした作品である。したがってラテン・アメリカの革命状況を題材として、自由を求めることの意味と危険を暗示した作品である。また思想と主義を信じることの難しさと危険性を提示しながら、時代の流れに翻弄される民衆と国情を描写した興味深い作品と言えるであろう。この作品の秀逸さは、ヒーローとヒロインを通して以上のようなラテン・アメリカの風土に潜む精神的な、また政治的な危険性をシンボライズした点にあると言えよう。

注

- 1 Jocelyn Baines, *Joseph Conrad; A Critical Biography* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1960), p.294.
- 2 Zdzislaw Najder, *Joseph Conrad; A Life* (Rochester: Camden House, 2007), p.348.
- 3 Joseph Conrad, 'Gaspar Luiz', *A Set of Six, The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad* (London: The Gresham Publishing Co. Ltd., 1925), XI, 18. 以後 Conrad の作品からの引用は全てこの版によるものとし、本文中の 'Gaspar Luiz' からの引用は頁数のみを記入する。
- 4 Addison Bross, "A Set of Six : Variation on a Theme", *Joseph Conrad : Critical Assessments*, in 4 Volumes, ed., Keith Carabine (Mountfield: Helm Information Ltd, 1992), vol. III, p.105.
- 5 Stephan Ross, *Conrad and Empire* (Columbia: University of Missouri Press, 2004), p.115.
- 6 Gilbert M. Cuthbertson, "Freedom, Absurdity and Destruction: The Political Theory of A Set of Six" *Joseph Conrad: Critical Assessments*, in 4 Volumes, ed., Keith Carabine (Mountfield: Helm Information Ltd, 1992), vol. III, p.101.
- 7 *Ibid.*
- 8 *Ibid.*

- 9 Jacques Berthoud, *Joseph Conrad; The Major Phase* (Cambridge: Cambridge University Press, 1978), p.126.
- 10 Wilfred S. Dowden, *Joseph Conrad; The Imaged Style* (Nashville: Vanderbilt University Press, 1970), pp.105-106.